

最優秀賞

私の節水日記から考える

京都先端科学大学附属中学校 二年

小高 恵真

「オーストラリアでは水を多く使わないでください。」これは留学に行く前、先生に言われた言葉だ。オーストラリアは、日本とほぼ同じ経度に位置しているが気候はまったく違った乾燥帯だ。そのため水不足が激しい。

私はこのテーマを見た時、オーストラリアの水不足について書こうとした。しかし、オーストラリアの節水を調べていると、日本はなぜ節水するのか疑問に思った。最初にいったように日本は乾燥帯に属していない。答えを調べると、「地球温暖化を進めないため」と出てきた。まさかの答えにおどろいた。水が不足するから節水しているだけと認識していたからだ。もちろん前者の理由もあるが、「蛇口をひねって水を出す」「下水処理場での処理」「水を川や湖に流す」このすべての過程にエネルギーが使われている、なんて考えたことがなかった。大きな認識の違いである。ふり返ってみると私は、意識的に節水をしていなかった。食器洗いは水を出しっぱなしにするし、シャワーもずっと流している。こんな行動ばかりだったため、オーストラリアに行く前は過剰に心配した。しかしいざ行くと節水しないといけないという意識が作られた。それほど周りが意識的に取り組んでいたからだ。オーストラリアでは一人が一日に使う水の量はなんと日本の二分の一である。これらことから私はオーストラリアの節水を日本の節水につなげられるのではないかと考えた。私が留学中に体験した節水は二つある。一つ目はお風呂についてだ。オーストラリアでは毎日お風呂には入らないのが普通だと知った。おどろくのはその入浴時間だ。その時間なんと四分から七分くらいである。二つ目は食器洗いだ。食器は水を溜めた所に入れていた。これは日本でもやっているもの

である。しかしある所では犬に汚れを取ってもらったりするらしい。ほかの節水方法も調べてみたところ、決まった曜日のみ庭木や芝生に散水する、洗濯は週に一回や二回のみ、などみんなが節水に気を配って生活していることが分かる。けれどこの中には文化や気候の違いからなりたっているものもあるだろう。日本でもし三日間お風呂に入らなかつたら、臭そうと思うだけだ。もちろん私はオーストラリアの節水方法を真似したいと思うが、本当に真似したいと思うのは、みんなが節水に自ら取り組む姿勢である。オーストラリアの人たちからするとごく普通のことなのかもしれないが、私はその「ごく普通」という行動を前まで気にもしていなかった。その行動の素晴らしさを多くの人に伝えたい。たとえ一人が変わったとして何かが大きく変わる訳ではない。けれどももし十人、二十人、七十人、百人となれば少しずつでも変化していくと思う。一人一人の意識も環境問題も。

オーストラリアと日本の一日の水使用量の差は人口や環境の違いもあるため、すぐその差がうまるとは思わない。けれどオーストラリアだけでなく節水に取り組んでいる国は沢山ある。ほかの視点から見れば、新しい節水方法が見つかるかもしれない。日本の節水の取り組み、理由、影響、簡単なことでも調べたり、行動していくことが大切なのではないだろうか。

私の父は京都市上下水道局に勤めている。そのため、私は水にとっても関心を持っている。例えば、この世界に二〇三〇年を目標年度とした持続可能な開発目標SDGsが存在する。それは、十七のゴールと一六九のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓っている。この目標の中で六の「安全な水とトイレを世界中に」について考えていきたい。

まず、現在、水道の設備がない暮らしをしている人は世界中に二〇億人もいる。だが、人々はその数すら多いと感じる人は少なく、気にもとめていないのではないだろうか。私も以前、そう思っていた。しかし、それは大いに間違っている。なぜなら、現在の世界人口は約八〇億人いる。その中の二〇億人ということは世界の人々の四人に一人が水道設備のない不自由な暮らしをし、虐げられているということだからだ。また、トイレがなくて、屋外で用を足す人は約五億人もいる。先程の数と比べると決して多い数字ではないが、これが一つの国で起きている現状であれば、とても大変なことである。それは、一つの国で環境が悪化していつても関わらず、他国はのうのうと暮らしているということだからだ。

例えば、あなたが日頃耳にすることは何だろうか。近年では物価高騰で生活が苦しいことや、電気代が高騰していることなどだろうか。その中でも「水を出したままにしまった。」という話を周りから聞いたたり、話したりはしていないだろうか。私もそう話したことがある。しかし、なぜ、そんなに反省せず、逆に笑ってその事を話しているのかと疑問に思う。なぜなら、その人は「水」は常時入手できると考えており、そこまで大切だと思っていないからだ。私は、これらの事に怒りたい。その

理由は、安全な水すらない人が世界の四人に一人いて、私たちは奇跡的に水がある側に生きている。それにも関わらず、水の大切さを知らず、ただ平凡に生きている人には言う権利はないと思っているからだ。このことは他の目標でもいえることだ。

しかし、だからといって、現在私たちが「支援」をする事が困っている人々のための最善の策とは言えない。支援によってもたらされるものは一時的な回復にすぎないからだ。例えば、鶏の話を知っているだろうか。先進国側が鶏の飼育の方法を発展途上国のある村に提供したがそこでは、その飼育方法がうまくいかなかった。しびれを切らしたその地域の人々はとうとう鶏を食べたという話だ。私は先進国側の配慮が欠けていたと考える。ここでの「配慮」とは、発展途上国の文化や気候について知って、その上で支援に手間工夫をほどこすことだ。この一歩は、発展途上国のニーズに応えるものでなければならぬ。そのニーズは与える側の人が現地に行つて、村の人に聞いたり、調べて見つけ出す。したがって、先進国の技術を提供しても文化や地形が違う発展途上国では根づかない。だから、発展途上国に合わせた技術は、先進国側で提供するか、現地で協力していくことが重要となる。

今、地球は「環境破壊」に苦しんでいる。温暖化で砂漠化がすすむ地域もあり、「水」は永久的にあるものではなく、いつかは終わりが来ると認識すべきだ。だから、水を再利用する技術を世界に広めていかなければならない。ただし、技術をそのまま他国に提供するのではなく、その国のニーズに合わせて、提供しなければならぬ。それぞれの国ごとに技術の基盤は同じにして他の部分をその国独自の工夫をし、持続可能なものにしていかねばならない。

我が家の目下の悩みは、「食洗機を購入するか否か」である。皿洗いが当番制で、洗うのが面倒くさい僕にとつては、是非購入して欲しいところだが、母曰く、購入目的は「時短」と「節水」らしい。

家族六人分の一般的な一度の食事で使う食器を手洗いすると、一度に約八十八リットルもの水を使用するという。日本の技術は凄いもので、食洗機を使用すると、これが九リットルまで節水できるという。

これだけ聞くと、すぐ購入以外の選択肢がないように思うが、そもそもこれは水道普及率が九十七パーセント以上の日本だからこそできることであつて、世界を見渡せば、決してこんな贅沢な悩みをいつている場合ではないのが現状だ。

エチオピアでは、僕と同年代の女の子が、一日の内、約八時間もの時間を水の確保に当てなければならぬという。しかも、それだけの時間をかけても確保できるのは、たった五リットル程。そしてその水は、茶色く濁っていて、まるで泥水のような状態なのだ。見るからに不衛生なこの水を、命をつなぐためには飲まざるを得ず、それが原因で下痢症を発症したり、コレラや腸チフス、赤痢などの感染症を引き起こす原因となっている。

実はこの赤痢という病気、昭和三十年代には、日本国内でも年間約九万人もの感染者が発生しており、中には命を落とす者もいたという。当時の日本における水道普及率は三十パーセントであり、現在の九十七パーセントという世界的に見ても高い普及率になるまでには、約四十年の歳月と、莫大な投資が必要だったわけだ。そしてそのおかげで、日本ではそのような感染症にかかる心配もなくなりいつしか「安心安全な水が常に手に

入る」ことが当たり前になっていった。

一日に約三百リットルの水を使用している私たちに對して、途上国の人々は一日約五十リットル以下で生活していると言われている。この数字だけを見ると、なんて水の無駄遣いをしているのだろうか、日本人は水に對しての意識が低いなあと思つてしまう。

けれど、下水処理は勿論のこと、工場排水で河川をむやみに汚染しないよう、適切な排水処理技術が確立されているし、雨水や排水のリサイクル技術も盛んで、限りある水資源を有効活用すべく、今もなお、研究や開発が続いている。決して、水に對して意識が低いわけではなく、水が身近で当たり前なものであるからこそ、大切に使う意識が芽生え、それが今の日本におけるインフラ設備を支え、より効率的な水資源の確保につながっていると考えるべきだろう。

発展途上国でも、日本と同じ様に四十年の歳月と莫大な投資を行えば、水道普及率が大幅に改善するのかと問われれば、その答えはきつとNOである。

時間とお金をかければ解決できる問題ならば、とつくの昔に世界中の水道普及率は上がっているはずなのだから、どれだけ複雑で一筋縄ではいかな問題なのか現状から垣間見える。先進国が途上国に出来る水の支援は、最近技術の提供や資金の提供だけではなく、それぞれの社会に見合う適正な技術を駆使してシステムを構築することであり、たとえ小さく貧しいコミュニティであつたとしても、水道施設を建設した後に、適正に運営できる仕組みづくりなども必要になってくるだろう。

近年よく耳にするようになったSDGsの六番目には、「安全な水とトイレを世界中に」と掲げられているが、まずは僕が自分でできることとして、母にこつそり伝えようと思う。

「食洗機、買うべきだと思うよ。」
と。自分でできる小さな一歩が、きつと世界を少しずつ変えていけると思うから。

特別賞

水と共に生きる

京都先端科学大学附属中学校 一年

三ツ木 丈琉

私は、自然が好きです。そして、母のふる里が大好きです。その場所は、大阪でたった一つの村、千早赤阪村です。人口は四千八百人余りの小さな村です。森林の面積が村の総面積の八割を占めています。昔から棚田を利用した米作りが行われています。祖父も五十年以上、米作りを続けています。祖父は、「水がきれいだからおいしい米が作れる。」とよく話しています。私は、祖父の作ってくれたお米が一番おいしいと感じます。

春休みに、祖父が水の水源を見に行こうと言ってくれて、初めて祖父母の水道の水源に行ってもうきました。

車で少し走り山の中に入りました。民家が無くなると杉林の中に林道があり、植林された木の中には百年以上前のものもあると聞きおどろきました。左右に大小さまざまな木や草が生いしげり道とは言えないほど狭い山道でした。車を止め、けもの道のような道を歩いて谷川の方に行きました。すると、川の流れがしだいに小さくなり、水源に着きました。小さな小さな川をせき止めて、水以外の物が入らないように網が張っており、下には水を運ぶのに必要なパイプから小さなマスに入り、そこから二本のパイプが川を通り沈殿タンクに送られていました。そして、余分な水はタンクから川に戻されていきました。私は、簡単な仕組みと形だけど、浄水場の様に水がきれいになっていくことに、よく考えられているなあとびっくりしました。

そして、パイプが山の中を通り、祖父母の家の近くの山の貯水槽に水が貯められていました。そこから二本のパイプで水が各家庭へと送られているようです。

私は初めて水源を見て、一滴、一滴の水が小さな流れを作り、山の奥のあんな小さな所から、水を集めて大きな流れを作って

私たちの元に届いているのだなあと、とてもおどろきました。また、祖父が「水源から水を引くためには多くの人と協力し助け合わないといけない」と言っていたことも心に残っています。

二十五年前までは、生活水はすべて山の水だったので、大雨で水がにごったり、断水などの事故が起きてしまったり、日照りが続くと水が減ってしまうこともあり、天候に左右されて飲み水の確保は大変だったと話してくれました。

そして、祖父から森には水源かん養機能があると聞き調べてみると森林は雨や雪などの水を少しづつ川に流してダムのような役割をしているということを知りました。水は地球の生き物が生きていく上で大切なものです。水の始まりを見て地球の雄大さを理解でき、水は無限のものではないということを知り、改めて見つめ直しました。

水とどう付き合っていくかを考えたときに私の住んでいる京都のことを思い出しました。

昔、父が京都にはたくさん地下水があると言っていたことを思い出して調べたところ約二百一億トンもの水があり水が豊かなところだと知りました。ですがこの大量の水を有効活用するために長く維持することが大切です。京都はこの地下水があるおかげで、染め物や食事などのすばらしい文化が発展してきました。京都から生まれた文化は豊かな地下水があるということが大きな影響を与えています。水は人々の文化や、生活を大きく変えてきました。今では水の汚染や、ゴミだらけになった川などもあります。これからは私達の周りにある水の環境の事を考えていかなければなりません。

私は、これから水を大切にしつつ、水を通じて社会や世界のさまざまな環境も意識していこうと思います。

佳作

水を大切に社会

福知山市立夜久野中学校 二年

飯尾 利菜

「ポタツ」「ポタツ」と、蛇口から流れ落ちていく水をじっと見ていた。

水は蛇口をひねればいつでもけじめなく出続ける。そのような水はどこからきているのか疑問に思ったため調べたことにした。

普段私たちが使っている水は、家の近くに流れている土師川や由良川、山の水である。川から取り入れられた原水は浄水場に送られ、色々な施設や薬品できれいな水につくり変えられ、家に届く。その後、使われた水は川に流れて海へ行くことが分かった。

そんな水が世界の十人に一人安全な水が手に入っていないことを知った。また、人口の増加や気候変動により、水不足に苦しむ社会が迫っている事も分かった。

私は水を守る方法についてあまり深く考えた事はなかったが、水不足に危機を感じ、具体的な取り組み案を二つ考えた。一つ目は、「自分が節水を行う。」という事だ。日々の生活を振り返ると料理や洗濯、お風呂、トイレなど水をたくさん使っている生活している。だから、「皿を使い終わったら紙やいらぬ布などでふき取ってから洗う」「歯磨きをしている間は水を止める」などが出来ると思う。そうする事で水を使う量が減ると共に洗剤を使う量が減るから、少しは環境破壊が抑えられると考える。しかし、人間は「生活用水」として使っているため水は汚してしまう。そんな中でも、使い終わった水の行き場に住んでいる生物たちの命を奪ってはならないと思う。だから、節水だけではなく、ゴミ問題にも目を向けて考えることが必要だと考える。「外でプラスチックゴミを見つけたら拾うようにする」や、「プラスチックゴミのリサイクルに協力する」などがあげられる。

これらの行動は意識すれば誰にでも出来る事だ。

一つ目は自分の行動についてだが二つ目は「呼びかけ」についてだ。私は、普段の生活で水を守るための取り組みをよく目にする。学校では保健体育委員が「節水」の呼びかけを行っている。しかし、ポスターは目を通すだけで、意識しようとしている人が少ないと感じることがある。よって、ポスターには、「水不足の危機や水不足に苦しむ人々について詳しく書く。」それから「節水の具体的な行動の仕方を書く。」このようなことをまとめて、児童生徒がよく通る場所に掲示することで「節水」の意識が高まり、行動してくれる人が増えると考えられる。水は無限にあるものではない。有限の資源である。私は水がない生活を想像できなかった。しかし、その反対側には私たちが毎日使っているきれいな水を知らない人がたくさんいる。どんなにきれいな水を飲みたくても飲めない人がたくさんいる。私はそのような人々を少しでも救いたいと思ひ、夏休みの自由研究で「ろ過」について実験した。すると、灰や小石、砂、布だけで泥水を私たちが飲めるきれいな水にする事が出来た。そこから、泥水をきれいな水にして飲めるよう周りの皆さんも「ろ過」を実際にして、少しでも知ってもらい広げていきたいと考える。そうする事で将来自分達で効率的に水が使える社会になると思う。さらに、「ろ過」について知ってもらうだけでなく、停電で水が使えなくなつた時に活用できるから少しづつ行えるようにしてほしい。

これからは、水がある事を当たり前だと思わず、水がある事に感謝して、これらの水を守る具体的な行動を徹底していきたい。また、世界には、「安全な水が飲めない人がたくさんいる事。」や、「水がない世界が私たちの目の前にまで迫って来ている事。」を忘れず、水一滴一滴を大切に、生活していきたい。水を守る事が出来るのは人間だけだ。だから、まず自分が「節水」を行い、未来を救う。

私は終礼後、すぐに教室から出て、水が出ている蛇口を固くしめた。

佳作

一滴の水から

京都先端科学大学附属中学校 一年

佐保 里衣奈

私は小学五年生の頃、びわ湖フローティングスクールで、「うみのこ」に乗り、びわ湖について学びました。

私がフローティングスクールの中で一番印象深かった学習は「琵琶湖の深呼吸」についての学習です。実は、琵琶湖は一年に一回深呼吸をしているのです。人間にとって深呼吸とは多くの酸素を体内に取り込むことですが、琵琶湖にとっては「全層循環」のことを指します。それは、冬の冷え込みで酸素を多く含んだ表面の水と低酸素状態の低層が混ざり合う自然現象のことです。これが一年に一度起こること、深層に棲む生物に酸素を与えることができるのです。私は、この学習をしたとき、自然は常に、何か一つが欠ければ崩れてしまいそうな絶妙なバランスを保っているのだと痛感しました。琵琶湖の生物を守るためにも地球温暖化を止めなければならないと強く思いました。

水の存在意義は生物を守ること以外にも数え切れないほどあると思います。それは、日本の景色と伝統を守ることです。日本ならではの景色は、静かなまちに川の流れる音や葉がゆれる音、風鈴の音など、自然の音が聞こえる美しさがあると思います。また、豊富な雪解け水を利用した米作りなど、昔の人々の知恵の結晶を受け継ぐ日本人の心も美しいと思います。つまり、日本や日本人、日本の風景が美しいのは、水があるからなのです。水はずっと守っていききたい存在ですが、課題もあります。

SDGsの目標十四に「海の豊かさを守ろう」という目標があります。海洋環境の現状と課題について、海洋汚染はかなり深刻な状況になっています。その原因の八割は陸地からの影響

であるといわれ、その海洋汚染は、海洋温暖化、海洋の酸素欠乏、海洋の酸性化といった状態が見られます。つまり、私達が頼りにし、必要不可欠と謳っている海を私達の手によって汚しているのです。私たちがきれいな海を取り戻すためには一人ひとりが意識を高め、現状を知り、取り組むべきだと私は思います。

「大地、空気、土壌、そして水は、祖先からの遺産ではなく、私たちの子供たちから貸し出されているものだ。」

この言葉に私は衝撃を受けたと同時に、深く納得しました。水は祖先から引き継いだものではあるが、今後子孫に必要とされるものだと気付きました。また、私たちも祖先に貸し出しているのだと思うと、一滴の水には何百年も何千年もの歴史が凝縮されているように感じ、複雑な気持ちになりました。

「水は非常に良い召使いだが、残念な主人でもある。」
この言葉のように水は動植物の生命に潤いを与えたり、私たちに美しい景色を見せてくれる存在です。しかし、水害をもたらしたり、人々を危機に陥らせることもあります。また、水不足の激化により、水源をめぐる争いを引き起こす可能性も大いに考えられます。使い方や存在意義を忘れたり、問題に向き合い、対策、解決することを怠ると、取り返しのつかない事態を招くことに繋がります。私は、水は正に「美しい花には棘がある」と言い表すことができると思います。

水は、地球上すべてのものに欠かせない存在です。そんな水を私たちがこれからも綺麗に使えるように、美しい状態で子孫に返せるように、水のありがたみを痛感し、守り続けていくことが、本当に大事なことで私は思います。

佳作

地球は本当に「水の惑星」なのか

京都先端科学大学附属中学校 二年

吉川 加恋

私は、水と言うと生きていくために必要な「飲み水」を思い浮かべます。しかし、飲み水よりも多く使用されているのは、「生活用水」です。朝、顔を洗う時や料理をする時、トイレに行く時、お風呂に入る時など、日々の生活を思い返してみると、確かに、大量の水を毎日使っています。調べてみると、一人あたり一日約二〇〇リットルもの水を使用していることがわかりました。

私は先月、学校での研修旅行でオーストラリアのコフスハーバーという地に訪れました。オーストラリアは自然が多く、広くて綺麗な海に囲まれているため水が豊富にあると思っていました。しかし、話を聞くとオーストラリアは乾燥している地域で水不足に悩まされているということを知りました。年間降水量は日本の約三分の一で、広い砂漠が広がっていることが水不足につながる大きな問題の一つです。そのため、オーストラリアの人々は日常から節水することを心がけていました。

例えば、日本人のようにお風呂に入る習慣がなく、シャワーも五分〜十分程度で終わらせます。

それに比べて私は水を出しっぱなしにしているため、節水の意識が高い姉にいつも注意されています。洗顔時などに水を一分間出し続けると、十二リットルもの水が無駄になるそうです。私が意識していない間に大量の水を無駄使していたことになりました。私も、オーストラリアの方々を見習って水を大切にしようと思います。

そして、限りある水資源をどのようにして確保していくかが問題です。そこで、日本は降水量が多いため、雨水を生活で有効に利用すれば良いと思います。昔の人々は「天から降る恵み

の水」という意味をこめて、雨水を「天水」と呼んでいたそうです。それは人々の生活を支え、作物を育むなどと、命をつなぐものとして大切にされてきました。ですが、今では蛇口をひねれば簡単に水を得られるようになり、私たちは自然の恵みへの感謝を忘れてしまいました。その価値をもう一度見直す必要があるでしょう。雨水をためておくことで、大切な水資源を守ることができるほか、いざという時も生活用水や初期消火などに活用できます。また、降った雨をタンクにためておくことで都市型洪水の軽減に大きく貢献できます。私たちの生活を豊かにするとともに、昔の人々の知恵を未来へと伝承していくことも大事だと思います。

また、水の浄化装置も発明されており、水の再利用ができるようになりました。それによって、水を最大限に活かすことが可能になりました。

私は、そんな便利になった社会の中で困った時でも生活しやすくなるよう、日常から節水しようと思います。水の惑星と呼ばれている地球ですが、水不足によって苦しんでいる人たちがたくさんいます。必要がないのに、私が水を一分間出している間、一分間苦しんでいる人たちがたくさんいるということを意識してこれからの生活を送っていこうと思います。

一人のためにみんなの力を

京都先端科学大学附属中学校 三年

高瀬 ふう

経験したことはないことは実際にしてみないと分からないことばかりだ。それも知ろうと思わなかったら事実に触れることさえなく時が過ぎていく。こうしているうちにも刻々と様々な問題は私たちの生活を脅かすものへと発展し続けていると思うと私は自分の無力さに打ちのめされた。

二〇五〇年には人口の約半数が水不足に晒される。その言葉を見た時は動揺して繰り返しその言葉を見返した。だが当然何度見ても同じ結果で、問題が深刻化するまであと二十数年しかないということだけがはつきりと示されていた。今でさえアフリカなどの発展途上国では水不足や不衛生な環境による病気などの水に関連する問題は多くあるのに、これからもっと深刻化していくのだろうか。

私はこの予想を知って驚いたと同時に自分の無知さを突きつけられた気がした。同じ世界で同年代の子供たち、もつと言えば私より遥かに幼い子供たちがこんなにも苦しい状況下で懸命に生きているのに、私はその現状も知らずに毎日当たり前だと思っている環境で過ごしている。今この瞬間だって水を汲むために重いバケツを抱えて歩き、学校にも通えず何度も川と家を往復して一日を終える子供たちがいる。そんな子供たちを想像すると胸が痛んでやまない。

私も以前断水を経験したことはあるが、今思えばすぐに水が支給されてきていたことからたくさんの人たちに助けてもらったことがわかる。ひと家庭だけの問題ではないからこそ人の繋がりが大切にしなくてはならないと実感した出来事だ。では今断水が起きたら、私には何ができるだろうか。改めて考えてみると水がなくてはできないことは想像していたよりも多

い。そして私は清潔な水が支給されること前提で考えていたことに気づいた。確かに日本であれば設備が整っているとろでは清潔な水を提供してくれるだろう。でもそれがもし外国の場合だったら。もしアフリカだったら。水を運んでくるのに時間がかかる上にきつとその水も衛生的だとは言えないだろう。だから私はそもそも水の在り方の普通を間違つて捉えていたのだと考えた。

私水と言われて想像するのは透き通っていて簡単に手に入る綺麗な飲料水。だが世界の現状を知ってから私が想像する水は何時間もかけて歩いてやっと手に入る泥水も同時に浮かび上がるようになった。私は知らず知らずのうちに自分の中で当たり前を作っていてその貴重さにも気づけなかったのだ。これからは当たり前という考えを捨てて、ひとりひとりが生活する上での考え方を大切にしたいと思った。人の数だけ考えは生まれるし、当たり前という一般的な意見は誰にでも当てはまるものではないから、それぞれの国や地域、家庭での生活を知り、自分の生活と対比することで資源に対する意識も変わるのではないだろうか。私もそうすることで水資源に対する考え方が変わり、今は節水を心がけたり、水以外の支援活動に興味を持つようになった。最近では家に多くたまった割り箸を再利用できる方法を探してみたり、勉強をすることが募金につながる活動に目を向けてみたりしている。どれも小さなことかもしれないが、たくさんの人が努力を積み重ねていくことで一人また一人と命が救われていくと私は信じている。そしてその行動を見てまた誰かに努力のバトンが繋がっていく。水という人間にとっては何もかも大切な資源をどう使うかは私たちの手にかかっている。きつと何もしないまま十数年が過ぎればいずれ水を奪い合う戦争が勃発するだろう。そうすれば無意味に人の心も体も傷つくことになる。未来のお互いの命を守るために今ある命に目を向けて行動することが今の私たちにできることではないだろうか。